地球　第八卷第四號　昭和二年十月一日

九州刀工分布の歴史理地的意義（上）

小川琢治

一

本誌第三卷に刀劍の地理的研究を連載し、日本鍛刀工業が古く奥羽地方に起つたこと、その起源が滿洲沿岸を經て北支那と直接の交通に在つたこと、鐵鑛の採掘から砂金鑛の發見を誘導して東北の開發を見たこと等を論じ、近畿中國の鍛刀工業が主として蝦夷俘囚の移住により起つたことに及ぼした。久しくその續稿を起草する暇がなかつたが、今夏小閑を得て九州即ち筑紫物の銘文を研究した結果を茲に公にする。

從來の鍛冶系圖に據れば九州の鍛刀工業の中心は四つあつて、豊後宇佐、筑後三池が最も古く、薩摩波平、筑前博多が平安朝以後に順次に興つたといひ、鎌倉時代以後に肥後菊池の延壽、豊前了戒、豊後高田、筑前金剛兵衛、筑後大石等の諸派が諸國に出で、波平一家のみは平安朝から續いて榮へたといふ。

此の古來既知の資料から觀て、交通、貿易、戰爭等と關係して鍛刀工業の盛衰のあつたことが前

稿に論じた所と徑路を同くするを知るに足るのである。然れども九州の鍛刀工業が奈良朝頃から近畿を中心とした中央文化が地方に波及して地方開發の結果として、中央の影響を受けて漸く興たものであるかは疑はしい。鎌倉時代以後に輩出した諸國刀工に關する傳說には此の如き徑路を認むるも、三條宗近が薩摩に流寓した傳說の如きは根據の知れぬのみならず、三條物と波平物との作品に共通の特色が認められぬ所から觀て、此の如き古傳の取るに足らぬことは言ふまでもない。

歷史地理學の見地から考察すれば、九州は大陸交通の門戶たる地位を占め、之と一衣帶の水を隔て相對する朝鮮半島は支那本部との交通の陸橋を成し、曹魏との使節が半島の西岸から對馬壹岐を經て肥前に來たことが三國志(魏志)の記載に徵して明かである。

三韓人日羅の來着した土地が肥後の葦北地方であつて九州の中央を橫斷して豐後に來たといふ傳說は西岸の中部にも亦た大陸との交通の行はれたことを語るもので、是も亦た無視し難い。我々は豐後摩崖石佛を研究して大分臼杵等の沿岸の唐宋を通じて外舶來航に對する要津であつたことを知り、大友氏時代に明葡諸船の來る以前に既に同樣の交通が行はれたことを推定して初めて大分に於ける龍門の樣式と同じ石佛が國分寺と共にあり、臼杵在深田に杭州西湖の吳越王錢氏の時代に出來たものに酷似する樣式のがある事實を說明し得ると信ずる。近頃濱田博士の豐後石佛の研究に當りこの關係を無視されたのは我々の同意に躊躇する所である。

此等の大陸交通の徑路は六朝から唐宋に至る間の文物輸入の途であるとすれば、鍛刀工業の歷史を考ふるに當り之を考慮に入れねばならぬ。

然るに大陸から舶來した刀劍に關して我が史爽に徵すべきものは殆どなく、日本書紀推古紀二十年(六一二年)の御製に

眞蘇我よ、蘇我の子等は、馬ならば、日向の駒、太刀ならば句禮の眞鋤、宜しかも、蘇我の子等ぞ、大君の使はすらしき。

といふ歌中の『句禮能摩差比』は吳又は句麗の劍と考へられ、當時頗る尊重されたことを窺ひ知る殆んど唯一の根據である。

支那の史料も亦た乏しいが、魏志東夷傳に弁辰に

國出鐵、韓濊倭皆從取之、諸市買皆用鐵、

といふので、第三世紀頃に鐵が朝鮮から內地に輸入されたことが明かである。又た同傳倭人の項に景初二年(二三八年)日本の使節の答禮として錦絹等の織物、銅鏡、眞珠、鉛丹等と共に五尺刀二口を貰つた記事が見え、之と併せ考ふれば推古天皇の頃に至るまでの數百年はあらゆる文物と共に優良なる武器の輸入を大陸に仰いだ形跡を疑ふことが出來ぬ。是は明治開國の初に火器を歐洲から輸入しその後漸く內地に製作されるに至つたのと趣を同くし、少しも怪むに足らぬ。

此の關係は平安朝半に至つて一變し、天元五年(宋太平興國七年、九八二年)に奢然の入宋した時に鄭玄注孝經その他の書籍と共に鐵刀二口を獻じたと宋史日本傳に見え、彼に亡佚した經書と共に日本刀を輸出したのである。歐陽修又は司馬光の作として人口に膾炙する日本刀歌に

寶刀近出日本國、越賈得之滄海東、魚皮裝貼香木鞘、黃白間雜鍮與銅、百金傳入好事手、佩服

可以禳妖凶、

といふ句と、後に『逸書百篇今尙存』といふ句と對照させてゐるのは此の齎然の携帶した品目中に書物と刀劍とがあつた記載により大に發明される。

戰亂の多い大陸に於て古書の散佚することに何の不思議もないが、戰爭によつて進步すべき兵器の製造法までが傳承を失ひ、却つて太平の續いた我が邦に於いて進步して逆に輸出して名聲を博したのは太だおかしい。然れども事實は疑ふ餘地なく、明朝に入つて我が八幡船が支那の沿岸に出沒した頃に倍聲價を增したのである。

此の如く隋唐との交通が開らけてから三百餘年間に我が鍛刀工業が進步した筈で、その徑路に當る九州が日本鍛刀工業に重要な役割を演じてゐたことゝ推測される。故に我々の日本刀劍の起源を論ぜんとするに當り、此の大陸交通の大動脈たる通路に何時から鍛刀工業が起つたかを考究せねばならぬ。

二

九州の鍛冶に關する古い傳說は宇佐八幡託宣集に傳へた豐前宇佐郡厩峰の菱形池の間に鍛冶の翁あり云々といふもので、應永古寫刀劍古記(南洞院本古記)に

神息　元明天皇御宇和銅元年ニ作ル八寸五分ノ刀ナリ、宇佐宮住人、又銅細工行平鞆ナリ、他人ナリ

といふ傳說も之と關聯して起つたらしい。神息といふ銘は獨り日本古刀に限らぬ八幡大菩薩は鍛冶の元祖と關聯して信仰され、神息はこの神の御子を意味するもので劍鐔に論なく支那製の金屬器具

既にその隱銘が發見され、而してそれが日本では宇佐八幡と結び付けた傳說となつてゐるまでである

我々の利劍造りの古い忠に讀み得た中に

宇佐神社鍛冶工人大神比義上之、金剌宮即位卅一年庚寅春正月朔奉獻之、

といふのがある。之を託宣集に鍛冶の翁に大神比義が穀を斷つこと三年の後祈り、翁の形から三歲の小兒になつて現はれた八幡神の御姿を拜したといふ文と並べ考ふるに、鍛冶の神の崇拜が八幡神を祭る起源を成してゐるらしくなる。而してその八つの幡を表徵とすることは日本に始めて起つた佛敎の四天王を護法護國の神として崇拜する信仰と關係があつて、後にその神を應神天皇の示現と考へたものらしい。此の事は國華上に『九州石佛の研究』で詳らかに述べたから茲には省く。

然らば九州の鍛冶が宇佐に於て欽明天皇御宇に初めて起つたものかといふに、彥山の方が古いらしい。彥山緣起にいふ太古天津日子忍骨尊の靈蒼鷹に化して此嶺に降止し、本體を顯し給ふ、之を高住宮と申すといふ傳說が換骨奪胎されて、八幡大菩薩が金色の鷲に化して當山に影向するといふ傳說となつてゐる。又た彥山の開山には善正法師の傳說があつて、北魏の人で繼體天皇の二十五年(五三一年)に來錫して靈山寺を創建したといふ。日本の修驗道は近畿の文化中心地に來た佛法と趣を異にした民間の信仰として入り來つたことは諸國の權現の起源に共通に認められ、宇佐八幡の信仰は彥山の修驗道の興つた後にその影響を受けて出來たことが略ぼ疑を容れぬ。

隱銘には此の外に

日子山靈山寺鍛冶工人有牧(摩幾)上之、筒城宮即位二十五年辛亥

と讀めるものがあり、尙ほその外に

太原府鍛冶工人祝順(有孚)□世孫有□

といふ文もある。此の祝氏が北魏太原の金工の家たることは嘗て三代の雞尊を模造した銅器の隱銘に發見して知つたのであつたが、偶然またこの金工を祖としたものが彥山鍛冶の元祖になつてることが知れた。

若し我々の隱銘から推論する所が正鵠を誤らずとせば、修驗道と共に筑豐の山地に鍛刀工業の起つた結果、平安朝の末葉に行平が出る以前に既に法師の刀工がゐて定秀の如き名工が遙かに後れて出たと解釋され、北魏から佛法と共に入り來つて日本刀劍史の一頁を占めたものと考へられる。

彥山修驗道は傳敎大師の頃に至つて天臺宗となつた後倍隆盛を續け山上に僧房三千あつたと言ひ傳へた。此の信仰の中心が同時に經濟上の中心となり僧兵が養はれ、嘉保元年(一〇九四年)太宰大貳藤原長房が僧徒の蜂起に逢ひ逐電して上洛したといふ一事によりこの九州の山寺が洛北に割據した叡山衆徒に劣らぬ勢力を持つてゐたことを想像するに餘りある。筑前豐後の山間に鍛刀工業の發達した徑路は此の如く筑紫物の中に特色ある刀劍が出來たのである。

奈良朝の豐前刀工の名は殆んど全く傳はらぬが、唯一人

天平五年癸丑冬十一月吉日宇佐神宮寺僧行仁上之

といふ隱銘により行仁なるものが知れた。流布本諸書に行仁といふ刀工は鍛冶備考見出し補遺の如く薩州波ノ平建久といふもの一人しか見えぬが、南洞院本古記に、

行仁　埋鋒（ノタレ刄）筑紫法師なり、横やすり

といふ法師の鍛冶がある。此の筑紫法師行仁が多分銘文の刀工と想はれる。

本朝鍛冶考には定秀にも或は天平といふ異説を擧げてゐるが、本阿彌長根の校正古刀銘鑑に養和元年（一一八一年）作の裏銘が載つてる。我々の隱銘で讀んだ所では、刀莖の末端に劍の切物の上端を殘した大磨上脇指に

太原府鍛冶工人祝〇〇十五世之孫定秀謹鐫之

延曆十五年丙午春正月（以下無）

とあつて、前に擧げた有牧及び有摩幾とある祝有孚の後裔の移住者の末なることが窺はれた。

是に據れば定秀を天平とする傳説は平安朝末の一人の外に平安朝初に今一人あつたことを語るものと推定される。

我々の宇佐彥山刀工の銘文研究が尙ほ不十分であるから、他日更に之を補ふ積りであるが、若し茲に揭げた隱銘に大誤なしとすれば、彥山開祖が北魏善正法師なりとする修驗者渡來の傳説が架空の揑造に非ざることが知れ、同時に筑豐鍛冶の定秀行平一派の源流が明かとなり、大陸直輸入の鍛刀工業が此處に起つたと認めてよいのである。

三

九州に於ける古い刀劍で第二の有名な產地は筑後三池である。此地には正世、その子典太光世（法名元眞）等の一家が有名であるが、その年代に關しては兩説あつて、或は和銅とし或は康平とする

も之を決定し得る紀年顯銘がない。然るに隱銘には正世光世の紀年磨上銘が頗るに頻繁に出るもので、何れも和銅前後のものである。故に我々は平安朝に引き下げた本阿彌長根の說には從ひ能はぬ。

此の地方は大陸交通に便な位置を占め、大陸文化の影響が近畿を中心とした中央より遙か早く此處に來た。その最も著明なるは繼體天皇の御宇の筑紫磐井の事蹟である。古事記には『此の御世に筑紫の君石井(イハキ)天皇の命に從はずして禮なきこと多かりき。故物部荒甲(カヒ)の大連、大伴の金村の連の二人を遣はして、石井を殺(ト)らしめ給ひき』といふに止るも、書紀の繼體天皇紀二十一年の章によれば、近江の毛野臣が新羅に破られた任那を復興せんとするに對し、新羅が筑紫國造磐井の叛逆を謀りつゝあるを知つて之と聯合して毛野の軍の渡船を遮らしめたので、翌二十二年大將軍物部大連麁鹿火が盤井を伐つて之と御井郡に戰つたといふ。又た釋日本紀に引いた風土記逸文によれば磐井の墓は

高七丈、周六丈、墓田南北各六十丈、東西各四十丈、石人石盾各六十枚、交陳成行、周匝四面云々

といふ。此の逸文によればその墓制が高大なる點に於て諸國々造の古墳に超絕し、殆んど近畿諸皇陵中の大なるものに比肩するのみならず、その石人を列陳した趣の支那の大きな古墳に類似することが又た頗る明瞭である。故に當時の九州西岸が他の地方よりも支那文化の輸入の盛なりしを表徵する紀念物が此處にあつて、人形原(バル)の名がその遺址として今も殘つてゐる譯である。

この時代の刀工の隱銘が菖蒲造の古い筑紫物と想はれるノタレ亂にて燒出しに打のけ地けい等ある刀文の面白い匕首(長さ六寸九分)に發見された。その銘文は

漢人首奈熊作、恭多羅伊囚漢人首奈熊作、筑紫國美伊計伊美吉熊作

等の外に

□□□十四年庚子冬十一月辛未朔伊囚臣奈熊作

□□□十五年辛丑正月庚午朔筑紫國造磐井上高良神御前

等の紀年銘も見える。此等の紀年は磐井の誅に服する前の繼體天皇即位の十四年及び十五年を意味するもので、西暦五二〇年及び五二一年に當り、尚ほ此の外に大魏洛陽鍛冶江人秦豹(炳文)□世之孫□といふ文もある。

此等を通觀すれば當時北魏との交通が三韓を通じて行はれ、洛陽の鍛工秦氏が百濟(恭多羅)を經て來たもので、前の豊前刀工の祖先が太原府祝氏を祖とするのと同じくその徑路が窺はれると信ずる。

之を同時の大和朝廷の大陸交通の記載に比較するに、梁から司馬達等が來つて佛教を齎らしたといふ傳說との對照が面白く、或は後者の航路は九州の南端を回つて豊後水道を通過する唐宋以後の線に沿ふたのでないかと想像される。

尚ほ之と同時に問題となるのは磐井といふ漢字の外に以發維といふ萬葉假名にも綴り、又た屢茨城及び以發良岐或は乙弖朗と綴つた他の人名も讀まれることである。繼體天皇紀によれば磐井の子に筑紫君葛子(クツコ)なるものが居て、父に坐して誅せられるのを恐れて糟屋の屯倉を獻じて死罪を贖はんことを求めたとあるのから推せば、或は葛子の外に尚ほ茨城なるものが、その一族に居たと想はれ

る。北史(卷四十九)を觀るに乙弗朗なるものが北魏の末に武勇を以て名を顯はし大官に至つた外國人として載つてゐる。傳に據れば『字通照、其先東部人也、世爲部落大人、與魏徙代、後因家焉云々』といふ。若し茨城乙弗朗が同人とすれば磐井の一敗地に塗れた時にその一族に逃れて大陸に渡つたものがあつて、義經渡滿の傳說に酷似した事件が千四百年前に行はれたのみならず、此の方が前後の事情地理的關係等に寧ろ蓋然性が多く、且つ支那正史に片鱗が閃めいてゐるだけ義經傳說よりも把住點のある譯である。

刀工系圖の方から之を觀るに、漢人首秦熊なるものが洛陽の秦豹なるものゝ後裔で、早く九州に來てゐたことは頗る注意に値する。古い河內鍛冶に秦包平なるものが備前包平と同時で、或は同人或は別人と看做す兩說がある。若し我々の讀んだ通りに信じ得るならば、此の河內包平は備前鍛冶と別系で、三池鍛冶の近幾代表者となり、慶長如手引に『備前作に似ざれども同作といふは不審なり』とあるのが當を得た見解となる。

三池鍛冶の系圖も亦た未だ時代を逐ふた系統的に調査を了らぬから、その詳細は他日稿を更めて之を述べる。(未完)